

レトリック作文の可能性 その1

— 技法の体系・配列・反復 —

伊土 耕平

筆者は岡山大学において2001～2012年の間に「レトリックと認識・発想」という教養教育科目を計7回開講した。ここではレトリック技法の概説と具体例の分析を行い、さらには実際に文章を書いてみることによって、認識力と発想力の向上をはかろうとした。本稿ではその経験にもとづき、レトリックを応用した作文教育について考えを述べる。すなわち、まず依拠すべき体系について論じ、そのあとレトリック技法の配列と反復について、具体例を中心に表現の効果や問題点を述べる。

Keywords : rhetoric, composition, arrangement, repetition

1. はじめに

ここに言うレトリックとは、「修辞」のことである。周知のようにレトリックは伝統的に、発想・配置・修辞・記憶・所作の五分野からなるが、これらのうち言葉のあやに関するものだけを対象とするわけである。「修辞」では「習字」と同音になってしまうし、語感が重苦しいので「レトリック」を使うことにした。

本稿の筆者（以下、単に「筆者」と表記）は岡山大学において「レトリックと認識・発想」という教養教育科目を2001, 2003, 2005, 2007, 2008, 2010, 2012年度の計7回開講してきた。大学教育において、レトリックを認識力・発想力の向上に活用できないか、というのが基本的な問題意識である。

参考までに2012年度のシラバスから、「授業の概要」と「到達目標」を引用しよう。

授業の概要：レトリックの技法（隠喩・緩叙法・反復法など）を、具体例にもとづき、体系的に説明する。その説明をふまえたうえで、計5回、A4用紙1枚程度の短い文章を書き、実際に技法を使ってみる。

到達目標：レトリックの主な技法を体系的に理解する。文学作品や日常語の表現を味わうことができ、そこに使われている技法を指摘できる。レトリックの技法を効果的に使って、短い文章を書くこと

ができる。

「到達目標」は「学生」を主語として文章化することが求められるのでこのような表現となったが、筆者のねらいの根本には、言葉の使い方を工夫することによって、認識力や発想力を少しでも向上させたい、ということがある。そのことは科目名に現れている。

7回も授業をすると、さすがにマンネリ化してくる。そこで、これまでの授業をふりかえり、うまくいった／いかなかった部分を明確にし、今後の可能性を探ってみることとした。受講生の作文例も紹介したいところであるが、執筆者の承諾を得ていないので割愛する。タイトルに「作文」とあるのに実際の作文はまったく出ず、教材であるところの、技法の具体例の検討が多くなってしまった。この点をご了解願いたい。

全体の量がかなりあるので分割し、今回は、レトリックの体系・配列のレトリック・反復のレトリックの三項目について取り上げる。（「配列」「反復」とは中村明のレトリック体系の項目である。後述。）

2. 先行研究

言うまでもなく、日本の作文教育には長い歴史があり、その中でレトリックに関係するものも多くあ

る。また、レトリックの研究書も膨大にあり、その中で作文教育に関係のあるものも多くある。それらを包括的に概観する力量は筆者にはない。あくまで、管見に入ったものの中からいくつかについて、筆者の立場から論評するにとどめる。

まず、明治以降、西洋修辞学をふまえた文章研究が盛んになったが、形式主義・文範主義に堕したので、それに入れ替わって自由主義的な作文が主流となった、というのが大方の見方であろう。修辞学は旗色が悪い。

それでも、明治・大正期の代表的な文章作法書である五十嵐力1909『新文章講話』など、評価が高い本もある。この本は個々の技法について、現在でも参考になる説明が多い。ただ、この本を作文教育にどのように生かしたのかは筆者には不明である。

戦後、山口正1969『レトリック理論と作文指導』が出たが、技法をどのように使うか、などの議論はあまりない。井上尚美1993『レトリックを作文指導に活かす』や鳴島甫1994『“レトリック”原点からの指導』も同様である。

論証や議論法なども広い意味でのレトリックに含まれる。井上尚美1977『言語論理教育への道』、中村敦雄1993『日常言語の論理とレトリック』などがあるが、論理的文章の構成が主となり、本稿とは方向性が異なる。

香西秀信・中嶋香緒里2004『レトリック式作文練習法』は西洋のプロギュムナスマタ（予備練習）を大学生に対する作文教育に応用した、大変興味深い内容であるが、個々の技法にはあまり言及していない。

最後に、岡山大学教育学部附属中学校では、次のような8種の「鑑賞のポイント」を使って指導をしている（神頭亮太2002の付録）。

対比、類比、意外さ、表記、音感、あいまいさ、逆説、象徴

読解指導で表現に注目する際に、この部分には「対比」が使われているなどと、生徒に意識化させるわけである。しかし、これらを作文に使用することはないようである。

以上、多くのレトリック技法を取り込もうとする作文教育は、近年あまりないようである。

3. 依拠するレトリック体系

レトリック教育においては、技法の体系性も重視すべきであると考えますが、どのような体系がよいのでしょうか。筆者独自の体系が示せればよいのだが、

現時点でそのようなものはない。先賢のものに依拠するしかない。

日本語のレトリックに関して、明治時代からこれまでさまざまな体系が提案されてきた。例えば、前述の五十嵐1909では、「詞姿」（＝レトリック技法）の原理として「結体／靡化、増義／存余、融会／奇警、順感／変性」（それぞれ表／裏の関係になる）のような体系化がなされている。

最近のものでは、中村明1991・2007、瀬戸賢一2002、佐藤信夫他2006などがある。中村のものは「言語操作という観点から」（中村1991：93）整理・体系化したもので、後二者はごく簡単に言えば「意味・形・その他」という分類である。

筆者は上記の授業において、2008年度以外は中村の体系に依拠してきた。形式的な操作のほうが受講生にわかりやすいと判断したからである。2008年度だけ瀬戸2002を教科書に指定し、瀬戸の体系を使用してみたが、教えにくかった。本稿でも中村の体系に従うことにする。

中村の体系の枠組みは次のようなものである。

- I. 展開のレトリック：1. 配列 2. 反復
3. 付加 4. 省略
- II. 伝達のレトリック：5. 間接 6. 置換
7. 多重 8. 摩擦

それぞれについて、授業で筆者がよく用いる模式図を用いて簡単に説明しよう。

- | | | | | |
|----|-----|---|---------|---|
| 展開 | ABC | ⇒ | C, AB | ① |
| | | ⇒ | ABCC | ② |
| | | ⇒ | ABCd | ③ |
| | | ⇒ | AB_____ | ④ |
| 伝達 | A | ⇒ | A | ⑤ |
| | | ⇒ | xノヨウナA | ⑥ |
| | | ⇒ | AB | ⑦ |
| | | ⇒ | △ | ⑧ |

それぞれの左辺がもとの形とする。まず「展開」のレトリックは複数の要素の並べ方に関するものである。①「配列」は要素の位置を変える、②「反復」は同じ要素を繰り返す、③「付加」は異なる要素を付け加える、④「省略」は本来あるべき要素を略す、というわけである。次に「伝達」のレトリックは、要素が一つである。その要素をいろいろに操作する。まず⑤「間接」はほやかすなどする、⑥「置換」は似ているものxなどに置き換える、⑦「多重」は他の要素Bがだぶる、⑧「摩擦」はAが横倒しになっ

ているのだが、違和感のある表現である。

このような模式図で受講生の理解が進むのかどうかは判然としないが、多少興味を引くのは事実である。それぞれの違いを理解する助けにはなると思う（例えば展開と伝達の違い）。

受講生には体系性にも注意してほしいと思っている。すなわち、「配列」は要素の数は変わらず位置を変えるだけである。ある意味では一番シンプルな操作だ。次に「反復」は同じ要素を付け加え、「付加」は異なる要素を付け加える。同じ要素を付け加えるほうがより単純であろう。その次に“付け加え”の反対の「省略」がくる。以上のように、単純なものから複雑なものへと体系化されているわけである。以上は展開のレトリックであった。

次に伝達のレトリックではまず、指示物をあいまいにする「間接」がくる。次に、他の要素と代えてしまう「置換」がくる（置換の一種である直喩や隠喩では元の要素も消えずに残るが）。後者のほうがより複雑な操作であろう。もっとも、例えば換喩（置換の一つ）は間接表現にも使えることからわかるように、「間接」と「置換」は形式的には同じである場合も多い。目的の違いと理解できる（中村1991：261）。その次は、別の要素がだぶる「多重」である。こちらは、だぶる要素Bが直接はわからないのであるから、置換よりも複雑な技法である。最後に、表現形態に違和感を作りだして注意をひく「摩擦」がくる。これは多重までとかなりタイプが異なる。

以上はかなり筆者なりの理解を含み、中村の真意とは多少ずれているかもしれない。

なお、受講生には上記8項目くらいは覚えよと指導している。体系的理解の第一歩だからである。また作文の際も表現を考えるヒントになる。その覚え方として、各項目の頭の音を取って「ハハフシ、カチタマ」と唱えさせている。意味をあてるなら「母不死、勝魂」である。かつて、これを不思議な呪文だと言って気に入っていた受講生もいた。

レトリック技法の体系について、以上のような説明を行ってきた。受講生の理解度も悪くなかったと考えている。

ちなみに“レトリックの技法は無意識に身につくことが重要であって、技法の名などは覚えなくてよい”という考え方もある。筆者も細かい技法名をすべて暗記する必要はないと思う。しかし、少なくとも大学生くらいになれば“方法”にもっと意識的であってもよいと考える。自分が今どのような言語操作をしているのか、それが他の操作とどう異なるのか、などを意識するほうが、表現力の向上に有益であろう。

以下では各論として、①の「配列」の技法から検討していく。

4. 「配列」のレトリックに関わる諸問題

4.1 概観

「配列」には要素の並べ方に関する技法が集められている。順序正しく並べる「序次法」(1.1)に始まり、その反対に奇言を先にする「奇先法」(1.2)、情報を故意に待機させる「情報待機」(1.3)、……のように体系化されている（カッコ内に中村2007でのコード番号を記す。以下同様）。

主な技法について、先のように模式図を使って説明すれば次のようになろう。

序次法 (1.1)：A B C…（順序正しく）

奇先法 (1.2)：X! A B C…（奇言が先に）

情報待機 (1.3)：A B……C（Bの直後にくるべきCが後方に）

照応法 (1.4)：A……B（Aと関連のあるBが隔置される）

対照法 (1.5)：A…， A'…（AとA'が対照的）

漸層法など (1.6)：A B C（だんだん盛り上がる）

カットバックなど (1.9)：A X B Y C Z（二つの系列A B CとX Y Zが交互に）

語順操作 (1.10)：C， A B。（一つの文の中で語順を変える。句点に注意）

これらはいずれもとくに理解が難しいものはない。受講生の作文を見ても、とくに間違いやすい技法はなかった。作文では、倒置法・奇先法・対照法などがよく使われる。

以下に、いくつかの技法について問題点などを検討する。

4.2 序次法 (1.1)

「順序正しい」という場合の「順序」にもいろいろある。時間的順序（出来事の順）、空間的順序、番号順、など。受講生の作文を見ると、出来事の順（例：朝起きて、顔を洗い、朝食を食べ、……）を使う者が多い。

2012年度の授業で紹介した次の例も出来事順であるが、一捻りして、すべて漢字で表現している。

(1)放鳥朱鷺雌雄営巢抱卵後無精卵放棄双眼鏡無念
[朝日歌壇, 2011.5.30]

さらに言えば、和歌であるのに漢語を多用している点、一つ一つの事柄を名詞だけで表現している点

(=点描法)も独特である。受講生の興味を十分引く。

なお本稿では、例文の末尾に出典情報をカギカッコ付きで示す。また、例文中の下線部は筆者の付けたものであり、/ (スラッシュ) は原文の改行箇所である (スペース節約のために詰める)。

4.3 奇先法 (1.2)

どのようなものが“奇”であるか。授業で筆者がよく使う例は、梶井基次郎の「桜の樹の下には」の有名な冒頭である。

(2)桜の樹の下には□が埋まっている！/これは信じていいことなんだよ。何故って、桜の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことじゃないか。俺はあの美しさが信じられないので、この二三日不安だった。(以下略)

大学の授業で空欄補充をするというのは少し恥ずかしい気もするが、表現内容を考えるのには簡便な方法なのである。コメントカードを見ると、受講生の中には「作家と同じ発想などできるはずがない」と言っていて、いやがる者もいるが、「美のもととなる物は何か？」などと考えるのも、たまにはよいのではないかと考えている。

(2)の空欄については、受講生に質問すると「わからない」という答えが一番多いが、知っている者は「屍体」と答える。つまるところ、知っているかいないかの問題になってしまい、発想の訓練にはなりにくい。この点が問題である。しかし、有名な文章の冒頭も教養の一つには違いなく、覚えていて損はない。

その他、いきなり会話文で始まるもの、接続詞で始まるもの、なども奇先法の一つとしてよいだろう。奇先法のタイプ分けは興味深い問題だが、今後の課題である。

4.4 情報待機 (1.3)

これもよく使う例なのだが、次のようなものはどうか。

(3)がらんとしたコンビニの駐車場に、エンジンをかけたままの車が一台停まっていた。マフラーから吐き出される排気ガスが、綿のように白い。普通ならすぐに気づくはずなのに、珠代の言葉に動揺していたせい、それとも車が周囲の雪にとけ込んでいたせい、通りを渡り切るまで、それがパトカーだと気づけなかった。気づいた瞬間、光

代は足が竦み、その場に立ち尽くした。〔吉田修一『悪人』〕

第34回大仏次郎賞受賞作で、映画化もされた作品である。この例では、なぜ最初から「パトカーが一台停まっていた。しかし珠代はそれに気がつかなかった」などと表現しないのか、と受講生に問う。先の空欄補充と並んで、通常の表現との比較も、表現を考えるのにはよい方法である。

もちろん、あとに「動揺していた」とあるのでパトカーが認識できなかった、その意味で技法と言うより認識そのままの表現なのであるが、そのことも重要なことである。つまり、レトリックと認識は密接に結びついている。認識したとおりに表現し、表現がそのまま認識となっている、そのような場合も多いわけである。このことも受講生には考えさせたい。

4.5 照応法 (1.4)

これは、関連情報を隔置し、呼応するように配列する技法である。授業では次の有名な作品を例として何回も使った。中村1991 (p.115) も言及している例である。

(4) (冒頭) 或日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっていらっしやいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れております。極楽は丁度朝なのでございましょう。/ (中略) / しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のような白い花は、御釈迦様の御足のまわりに、ゆらゆら萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れております。極楽ももう午に近くなったのでございましょう。 (末尾) [芥川龍之介『蜘蛛の糸』]

言うまでもなく、「朝」→「午 (昼)」という関連があるわけである。このような関係づけは作品全体に結束性 (coherence) を与える。つまり文法的な問題でもある。

4.6 対照法 (1.5)

これは、「対照的な関係にある二つを並立させ、たがいに引き立て合うようにする修辞技法」(中村2007: 266) であるが、何をもって「対照」物と見なすかは、けっこう難しい問題である。

それはともかく、対照（対比）は小学校でも指導されることがあり、中学校でも、例えば先の岡山大学教育学部附属中学校の「鑑賞のポイント」の中にもある。

「対照法」と「対比法」は、中村2007では区別されている（コードは1.5と1.5.0）。前者については上述のとおりで、後者については「対照的なことばを呈示することで、意味内容の印象を鮮明にする修辞技法」と説明されている（p.268）。筆者としては、微細な違いは無視して、両者は同じものと受講生には言っている。この点、何か問題があるだろうか。

本当に「たがいに引き立て合う」のか。附属中学での研究授業（2012.10.30）で中学2年の生徒がそのように発言したので驚いたが、おそらくは参考書か何かでそのような記述を読み、対照とはそのようなものだという先入観があったのではないかと筆者は疑っている。筆者の収集した多くの例を見ても大抵は、引き立て合うことのない“対比”である。

さて、用例としては2012年度の授業では次のようなものを使用した。

(5) (冒頭) インドに赴任する韓国人ビジネスマンは、こう言って送り出されるようだ。「最初の1年間は働くな」／まず半年間をかけてヒンディー語を学ぶ。そして残りの半年でくまなく旅をする。インド人が何を考え、どんな商売なら成功しそうか。どっぷりと現地につき、商機をうかがうのだ／これに対して日本のビジネスマン。「仕方なく来ました」と弱音を吐き、休暇にはタイやシンガポールに“脱出”したりする。日本人の「内向き」を示すエピソードの一つと言えようか。先日訪ねたインドで耳にした話である／[滴一滴、山陽新聞2011.11.19]

とくに説明も不要なほど明確な対照表現である。原文の書き手も同じであろうが、若者の奮起を期待したいという思いもある。用例の選択にはそのような思いも込めている。

空欄補充問題も複数回出したことがある。例えば次のような例である。

(6) 学者は真実を追究しなければならない。しかし小説家は [] ことが仕事である。つまりあらぬ推理をこうして文字にするのは小説家の特権で、しみじみまじめに勉強してこなくてよかった、と思う。[浅田次郎『つばさよつばさ』]

これは浅田の自虐ネタで、「嘘をつく」が答えで

ある。「真実」の反対というわけである。

さて、対照にもいろいろある。これまでの授業で使った例を見るだけでも、風土（例：アメリカとフランス）、色彩（例：緑と赤）、などがある。何と何であれば対照になるのか、は認知の問題でもあり、興味深い。筆者の力ではこれ以上述べることがない。むしろ形から、いわゆる「対比のハ」を使えば（表現者にとっての）対照となる、と考えるほうがわかりやすい。

俳句で言う「取り合わせ」とも関係づけられそうだが、ここではこれ以上述べる材料がない。それはともかく、対照物を考えることも認識・発想の練習になると考える。

4.7 漸層法・漸降法など (1.6)

とくに教育学部の学生に考えてもらいたく、次のような用例を何回か使っている。孫引きである。

(7) (日本高校野球連盟主催の研修会の) 閉講式。講師を務めた星稜（石川）の山下前監督は英国の教育学者ウィリアム・アーサー・ワードの言葉で“教え子”を送り出した。「良い先生はかみ砕いて教える。優れた先生は考えさせる。偉大な先生は []」 [甲子園塾 仲間はライバル, 朝日新聞2010.12.3]

答えは「心に火をつける」。教育学部の授業でも何回か聞いてみたが、正解した学生は記憶する限りではない。「教えられる」「しゃべらない」などの、なかなかおもしろい答えがあった。逆に教養科目では、文学部の学生の一人が正解した。単にもともと知っていたとのことである。この場合、正解すればそれだけで終わりだが、それはこの授業の目的ではない。いろいろと“発想”する（考える）ことが大切である。その点からは教育学部生の反応のほうが目的に適っている。

4.8 語順操作 (1.10)

中村に従えば、倒置法 (1.10.1) と転置法 (1.10.2) は異なる。模式図で表せば次のようになろう (Pd = 述語)。

倒置法: A B Pd. ⇒ B Pd, A. (Pdのうしろへ)
 転置法: A B Pd. ⇒ B A, Pd. (Pdの位置はそのまま)

倒置法は、後に続く形で終わるので、まだ続くような感じが残り“余韻”が生ずる。転置法の文末に

はそのような余韻は生じない。

倒置法は「Pd, A, B。」のように複数の要素を後置することも可能である（次例）。この点も転置法と異なる。この例では子供たちの恐怖感が効果的に表現されている。

(8)けれども子供たちは、いまは笑いませんでした。提灯の光の中で、——影の多い光の中で、まるで生きている人間のように、まばたきしたり、ペロッと舌を出したりする人形……何というおきみなものでしょう。／——子供たちは思い出しました、文六ちゃんの新しい下駄のことを。晩げに新しい下駄をおろすものは狐につかれるといったあの婆さんのことを。／子供たちは、じぶんたちが、ながく遊びすぎたことにも気がつきました。じぶんたちにはこれから帰ってゆかねばならない、半里の、野中の道があったことにも気がつきました。[新美南吉「狐」]

さて次に転置法であるが、これまで何回も使った用例は、次のものである。

(9)28歳の時だった。初めて料理長になった南仏の店が、就任から4年で二つ星を獲得した。喜んだオーナーがお祝いにと、自家用飛行機で小旅行に連れて行ってくれた。5人を乗せた飛行機はしかし、離陸してすぐに山の中に消えた。／パイロットも含め4人はほぼ即死だった。自分も大量の出血をし、半死半生の状態だったが、音にもおいてもすべて記憶にある。[フロントランナー 世界を駆ける伝説の「六つ星シェフ」, 朝日新聞be版, 2005.9.24]

通常、接続詞は文頭にくる。それを転置して(9)のようにすれば、「しかし」のあとに断絶ができ、次の「離陸してすぐに山の中に消えた」が強調され、意外感が増幅される。ちなみにこのような説明を高校での出前講義の際にしてみたのだが、高校生たちも納得してくれた。さらに言えば、シカシは対比的な意味があるのでとくに効果的である。実際、シカシを使った転置法の例は多い。

次の例では主題のハ（これも通常は文頭）が後置されている。このような表現も多い。

(10)素晴らしいことであった。愛しもせず一人の女を誘惑して、むこうに愛がもえはじめると捨ててかえりみない男に私はなったのだ。[三島由紀夫『仮面の告白』]

4.9 「配列」のまとめ

以上、「配列」の技法について具体例を挙げて考えを述べた。繰り返すが、奇先法で“奇”なるものを考えたり、対照法で対照物を考えたりすることは、認識・発想の訓練になると思う。

小学校においては、文や文章の構成を学習する。それらに比べれば、奇先法や倒置法などはある意味で邪道である。しかし大学生くらいのレベルになれば、奇先法や倒置法などについて考え、それらを作文に試してみることも、自分の表現の幅を広げることにつながられるのではないか。これが、レトリック作文の可能性のひとつである。

5. 「反復」のレトリックに関わる諸問題

5.1 概観

現行の学習指導要領では小学5-6年と中学1年で「比喩や反復などの表現の技法」について学習することになっている。反復が重視されているわけであるが、まずは、この反復にもいろいろあることに注意させるべきである（大学生に対しても）。

中村2007には50種近くが区別されているが、筆者なりに分類してみると次のようになる。

- a. 語句の反復：畳語法 (2.1), 畳点法 (2.2), ライトモチーフ (2.3), 連鎖法 (2.5) など
- b. 文の反復：反照法 (2.6), 鸚鵡返し (2.13) など
- c. 変形して反復：変形反復 (2.8), 倒置反復 (2.9) など
- d. 類義語の反復：同意反復 (2.11), 類義累積 (2.12) など
- e. 音の反復：押韻 (2.14), 畳音法 (2.14.3) など
- f. 句形・文形の反復：造句法 (2.15), 並行体 (2.17.1), 対句法 (2.18.1) など

中村体系では、小さな単位を扱う技法や単純な技法に若いコード番号がふられている。反復についても同様である。

以下、問題点などについて見ていこう。

5.2 畳語法 (2.1)・畳点法 (2.2)

言語は事物を一般化して表現するのが基本である。例えばネコと言う場合、ミケやタマの持つ個別性は捨象して、その共通性を捉えてネコと言うわけである。しかし、事物を一般化せず、なるべくそのままに表現しようとする場合もある。次の例を見ていただきたい。

(11)が、良平は手足をもがきながら、啜り上げ啜り

上げ泣き続けた。[芥川龍之介「トロッコ」]

(12)訓練はきびしかった。教員である下士官たちが若いだけに、容赦がなかった。／演習場は五キロほど先に在るゴルフ場の跡。膝のあたりまでのびた芝は足にからみ、滑りやすかった。／そこまで駆け足、そこでも駆け足、そこからも駆け足。前任下士官である室上等兵曹が先頭に立って走る。[城山三郎「軍艦旗はためく丘に」、『硫黄島に死す』所収]

ともに筆者が授業でよく使う例であるが、(11)は「何回も啜り上げて」と比較すればわかるように、啜り上げる一回一回に注視して描こうとする。そのことによって良平のしゃくりあげる様子が生き生きと表現されるわけである。また(12)は、「つねに駆け足」と比較すれば明らかなように、それぞれの場所での駆け足に焦点が当てられ、訓練の過酷さが鮮明となる。受講生もこのように理解する。

(11)と(12)の違いはと言えば、前者が「同じことばを直後にくりかえす」畳語法であり(中村2007:210)、後者は「文章中の一定箇所と同じことばをちりばめる」畳点法である(同p.215)。また、前者は動詞を、後者は名詞を反復している点も異なる。

語でなく、句の繰り返しである場合もある。上のaに「語句の」としたゆえんである。次の(13)も畳点法の一つとしてよいであろう。

(13) (アイオワ州のモーテル) そこでは時間は金太郎飴のように流れる。(中略)そこに存在するのは、テレビとベッドとバスという記号のみである。テレビとベッドとバス。テレビとベッドとバス。テレビとベッドとバス。その限りのない繰り返しである。それは人の心を徐々に蝕んでいく。[村上春樹『辺境・近境』]

5.3 連鎖法 (2.5)

いわゆる尻取り文である。授業では次のような用例をよく使う。

(14) 〈むずかしいことを やさしく やさしいことを □□ く □□ いことを ゆかいに ゆかいなことを まじめに〉——作家、劇作家井上ひさしさんのモットーだ／[よみうり寸評, 読売新聞2010.4.12]

これも孫引きで恐縮だが、よく引用される言葉である。空欄の答えは「ふか(深)」なのだが、それで

終わりではなく、全体が重と軽の反復となっていることにも注意させたい(難と易, 深刻と愉快, …)。つまり、言わば強弱のリズムを構成しているのである。

5.4 反照法 (2.6)

(15)いやなんです／あなたのいつてしまふのが／／花よりさきに実のなるやうな／種子よりさきに芽のなるやうな／夏から春のすぐ来るやうな／そんな理屈に合はない不自然を／どうかしないでみて下さい／型のような旦那さまと／まるい字を書くそのあなたと／かう考へてさへなぜか私は泣かされます／小鳥のやうに臆病で／大風のやうにわがままな／あなたがお嫁にゆくなつて／／いやなんです／あなたのいつてしまふのが(以上, 第一連)[高村光太郎「人に」、『智恵子抄』所収]

これはあまりおもしろくもない詩であるが、有名な詩なので、反照法の典型例としてよく使う。冒頭の一文が末尾で反復されているわけである。先の照応法などと同じく、結束性を担う。

5.5 倒置反復 (2.9)

(16)権之助の体から突然、四尺余の棒が噴いて出た。／——棒が手か、手が棒か、その早いことは眼にもとまらない。[吉川英治『宮本武蔵』]

さすがに吉川英治の作品はテンポがよい。この倒置反復はスピード感を出すのに一役買っている、おもしろい例である。そのように見えるという意味では、認識をそのまま表現している、とも言える。

5.6 類義語の反復

(17)ヤクザのために拘置所へ差し入れを持って行くとき(ママ)の憂鬱。ヤクザに虐げられた人々を思う時の陰鬱。ヤクザから少なくはない報酬を受け取る時の□□。新しい《鳥越家の伝説》はいつ成就するのだろうか? 鳥越氏は少しでも早く自分の(法律)事務所が持てるようにと一生懸命に働き、金を貯めた。[金城一紀「花」、『対話篇』所収]

「憂鬱」と「陰鬱」の類義語は何か? だんだんと憂鬱度の上がる、漸層法になっていることにも注意しなくてはならない(気分が下がっていくことに着目すれば漸降法ともとれる)。答えは「沈鬱」である。残念ながら、かつてこの問題に正解した受講生は記憶の限り、ない。

この例は、中村体系にぴったりするものが見当た

らない。強いて言えば「類義累積」(2.12)が近いか。

5.7 ^{おん}音の反復

谷川俊太郎の『ことばあそびうた』『同 また』(福音館書店、ともに1973)からは豊富に用例を採ることができる。例えば、

(18)かえるかえるは／みちまちがえる／むかえるかえるは／ひっくりかえる／／きのぼりがえるは／きをとりかえる／とのさまがえるは／かえるもかえる／／かあさんがえるは／こがえるかかえる／とうさんがえる／いつかえる [谷川「かえる」, 『ことばあそびうた また』所収]

あまり説明の必要はないだろう。さまざまな同音の繰り返しがある。単純におもしろい。

一つだけ指摘すると、全体が7拍の句で構成されている。つまり造句法(2.15。「リズム」とも)が使われているのである。末尾だけ5拍であるが、これは最後だけリズムを変えて、締めくくりとしているのだろう。万葉集などの古体の長歌が、五七、五七、五七、…ときて最後だけ五三七などとなっているのが想起される。

5.8 句形・文形の反復

次の例は同形節反復(2.16)で、それぞれの言葉を強調していると言うより、“すべてに同じことがあてはまる”ということ、つまり普遍性を強調している。

(19) (北朝鮮コマンドの将校が言う。)君たちは、ホンギルトンのように、福岡および九州に、新しい国を造るために半島を出たのだという声明を出す。それですべて解決する。日本帝国主義の圧政に苦しむ福岡および九州の人びとを解放するために、正義と自由を与えるためにやってきたのだと言うのだ。それはメッカを攻撃したムハンマドが主張したことと同じだ。またそれは十字軍の主張でもあり、アジアを侵略した日本帝国の主張でもあり、ヒトラーの主張でもあり、ナチスを打ち負かした連合軍の主張でもあり、アフガニスタンやイラクを侵略したアメリカの主張でもあった。ホンギルトンは、歴史的であり、普遍的でもあるの

だ」[村上 龍『半島を出よ(上)』]

5.9 反復のまとめ

以上、反復のさまざまな技法について見てきた。反復表現の効果について、これまでは“強調する”くらいのことしか言われてこなかったが、上に見た例からわかるように、さまざまな効果を出すことができるのである。このことも受講生には考えさせたい。このこともレトリック作文の可能性のひとつである。

筆者はこれまでにレトリック技法の用例を約2万件収集し、その中からおもしろい例を選んで授業で使用している。おもしろい例のほうが受講生の記憶に残り、効果的であると考えているからである。

上に挙げた用例も(4)以外は自前のデータベースから抽出したのであるが、もし先行研究などですでに使用済みのものがあつた場合はご容赦願いたい。

紙幅が尽きたので、「付加」以下の技法については続稿で述べることにする。

引用文献

- 五十嵐力 1909『新文章講話』早稲田大学出版部(縮刷版 1916による)
- 井上尚美 1977『言語論理教育への道』文化開発社
—— 1993『レトリックを作文指導に活かす』明治図書
- 香西秀信・中嶋香緒里 2004『レトリック式作文練習法』明治図書
- 佐藤信夫他 2006『レトリック事典』大修館書店
- 神頭亮太 2002『「言外の意味」を生かした国語学習』, 岡山大学附属中学校『研究紀要』34号
- 瀬戸賢一 2002『日本語のレトリック』岩波ジュニア新書
- 中村 明 1991『日本語レトリックの体系』岩波書店
—— 2007『日本語の文体・レトリック辞典』東京堂出版
- 中村敦雄 1993『日常言語の論理とレトリック』教育出版センター
- 鳴島 甫 1994『“レトリック”原点からの指導』大修館書店
- 山口 正 1969『レトリック理論と作文指導』(改定版, 教育出版センター 1984による)